

小山茂樹

『知られざる中東』の著者
中東経済研究所研究主幹

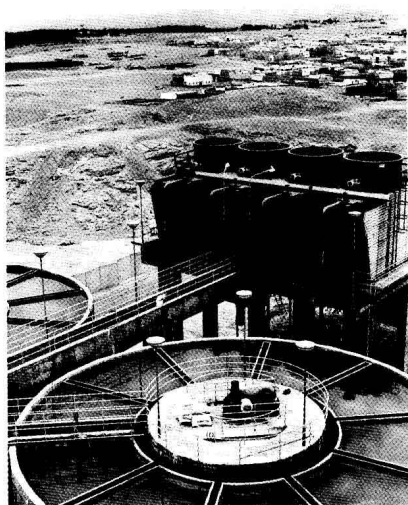
中東で 何が起つて いるか

世界危機震源地の分析

サイマル出版会

中東経済研究所研究主幹

小山茂樹著



世界危機震源地の分析

中東で何が起っているか

サイマル出版会



中東で何が起こっているか

小山茂樹著

© Shigeki Koyama
THE SIMUL PRESS, INC. 無断転載を禁ず

(発行所) 株式会社 サイマル出版会

編集・発行人 田村勝夫
東京都港区赤坂1-8-10 (〒107)
電話(03)582-4221(代)／振替・東京4-52090番
印刷・製本 図書印刷株式会社

1980年7月 Printed in Japan <0336-300486-2703>

世界危機の震源地——まえがき

一九八〇年四月二十四日未明（現地時間）に発生した米国特殊部隊によるイラン人質救出作戦の失敗ほど、近ごろ世界に衝撃をもたらした事件はないであろう。

この作戦は、エジプトから飛び立ったC—130大型輸送機六機と、オマーン沖海上の米空母ニミッツから飛び立った大型ヘリコプター八機がテヘラン南東三三〇キロのタバス付近の砂漠の「第一基地」で合流し、直ちに救出隊員をヘリコプターでテヘラン近郊の「第二基地」に運び、そこから車両を用いて米大使館に突入するという大作戦であった。

もしこの作戦が強行されていたら、人質の命運はいうに及ばず、米国・イラン関係は実質的な戦闘状態に入ったであろうし、そうなればペルシア（アラビア）湾全体が火の海と化すにいた

つたに違いない。まことに世界は危うく死の淵で、安堵の胸をなでおろしたのである。

「中東ではいかなることでも起きる」という諺のとおり、一九七九年二月一二日のイラン革命成立以来、中東は文字どおり世界危機の震源地となった。

サウジアラビアのメッカ襲撃事件の発生、ソ連のアフガニスタン侵入、米国・イランの外交断絶、イラン・イラクの事実上の交戦、トルコの持続する政治不安、シリアでの大規模な政治的紛争の出現、エジプトにおけるハリル内閣の総辞職と反サダト政治グループの公然たる活動、イスラエルの南部レバノンへの度重なる侵攻——こういった一連の政治的事件に加えて、アルジェリア、イラン、リビアなどのタカ派産油国の急進的石油価格引上げ、また主要産油国にみられる石油生産の削減と新たな石油販売政策の展開、といった事実もまた、大きな衝撃を世界にもたらすことになった。

*

イラン革命発生後の中東世界の政情は、こうして混沌の様相を深めつつあるように見えるが、その底流には反体制主義、反専制主義の台頭があるように思われる。

イラン革命自体がそれを有力に物語る証左だが、アフガニスタンへのソ連侵入も実は同じ理由によるものであり、イラクがイランに対して大きな牽制球を投げつつあるのも、国内に多数を占めるシーア派教徒がいつイランにならって蜂起するかもしれないという危惧である。シリアの内紛、トルコの政情不安、エジプトの反サダト主義の登場も、いずれもその潮流と無関係だ

といいきることはできない。

いま中東世界では、イスラム原理主義を説く急進保守の「モスレム同胞団」の活動が強化されつつあるという。八〇年三月初めに発生したシリアの北部大都市アレップおよび中部のハマ市での二週間にわたる騒乱は、このモスレム同胞団の反体制運動と深く結びついているといわれる。

元来、モスレム同胞団は、その創設国であるエジプトでは故ナセル大統領から徹底的に弾圧され、周辺諸国や湾岸諸国へと拡散していった。しかし、その後サウジアラビア、ヨルダン、モロッコといった穏健諸国のみならず、本家のエジプトでも、このモスレム同胞団を左翼勢力の有効な対抗者としてその活動を黙認するに及んで、次第にこの勢力は強化されていった。

ことに最近では、サウジアラビアのアル・ハラマ大寺院を占拠した叛徒が、このモスレム同胞団と哲学をわかちもつことが明らかとなったという。サウジアラビア当局の調査によれば、メッカ事件の首謀者ジュハイマン・アル・オタイビの著作は、クウェートではかなり広く配布されていたし、またメッカ事件には少なくとも四人のクウェート人が参加していたことが確認されており、クウェートではこれと同様な見解をもつ結社が現実に存在しているという。ヨルダンにはモスレム同胞団の基地があり、同胞団指導者シェイク・ハリーファは、一九七九年中央のシリア・モスレム同胞団の反体制運動を支持する宣言を行なった。

さらにシリアから亡命して一五年というシリア・モスレム同胞団の最大の指導者イサム・ア

ル・アタール氏によれば、「同胞団の運動は当初からシリア一カ国に限られたものではなく、アラブ世界からさらにはイスラム世界全般において展開されている」という (*Arab Report & Memo*, 1980. 2. 18)。

このような反体制主義の台頭がただちにイスラム主義の台頭を物語るかどうかは議論の余地を残すとしても、こうした動きがまた、中東産油国の石油政策にもいきおい反映されざるを得ないことも事実であろう。現在各産油国が推進しようとしている石油生産政策、石油販売政策が、自国の国益を追求した強い国民主義的色彩をもちつつあるのも、以上のような政治的情勢を背景としてはじめて理解されるのではなからうか。

*

本書は現在、中東で起こりつつある事態を、イラン、サウジアラビアおよびその周辺諸国を中心に、政治・石油・経済の各側面にわたって多角的な分析を試み、あわせて日本の進むべき道を論じたものである。

私はかねてから、エジプト・イスラエルの和平条約の基礎となっている、いわゆるキャンプ・デービッドの合意が中東に真の和平をもたらすものではないことを主張してきた。またサウジアラビアのおかれている立場からして、同国が単純な親米志向主義の国であるとみるのも早計であるとしてきた。さらに一九七九年二月に成立したイラン革命の性格も、これを短絡的に「イスラム」革命とすることにも疑問をさしはさんできた。その意味で本書は、私のこうした

年来の主張の背景を整理したものであるということができよう。

いうまでもなく本書は、今日「中東で起こっている」すべてを網羅しえたものではないが、現在の中東のかかえるもつとも重大な問題については、ひとまずカバーしえたのではないかと考える。複雑・難解な中東情勢を理解する一助となれば幸いである。

なお、本書補章の通商産業省通商政策局武田邦靖中東室長との対談は、「月刊・貿易政策」(一九八〇年二月号)に掲載したものである。その収録について謝意を表したい。

本書の作成には、私の現在の勤務先である財団法人中東経済研究所での五年有余にわたる研究がその基礎となっていることはいうまでもない。土屋清同研究所理事長、岩永博同研究顧問(法政大学教授)をはじめとする先輩・同僚各位にお礼を申し上げるとともに、原稿の清書その他を快く引き受けてくれた地引由美子さんに改めて謝意を表したい。

前著『知られざる中東』の増補版出版に続いて、本書の出版を快諾していただいたサイマル出版会の田村勝夫社長、およびご協力いただいた編集部の諏訪部大太郎氏、加賀雅子氏に心から感謝の気持を表したい。

(一九八〇年六月)

小山 茂樹

目次

中東で何が起こっているか

1章——中東世界で何が起こっているか

1 近東から中東への現代史	3
---------------	---

2 中東とアラブ	7
----------	---

3 湾岸諸国対アラブ急進派	13
---------------	----

4 イラン革命の複雑な波及力	17
----------------	----

2章——なぜイラン革命が起こったか

1 黒い金曜日	27
---------	----

2 イラン革命の社会構造	30
--------------	----

3 シャー体制はなぜ崩壊したか	37
-----------------	----

4 イラン革命とは何か	45
-------------	----

3章——激変する中東の政治地図

1	イランをうかがうソ連	51
2	米国の読み誤り	57
3	急変する湾岸諸国の政治地図	60
4	孤立化するエジプトの選択	67
5	高まる中東自立化の波	75
4章——革命後のイランはどこへ行く		

1	米大使館占拠事件への対応	81
2	体制づくりをめぐる対立と紛糾	85
3	混迷深める権力闘争の帰趨	90
5章——石油王国サウジアラビアの苦悩		
1	産油国としての発展史	99
2	埋蔵量をめぐる論議	103
3	壮大な開発計画	109
4	計画の挫折と続出する難問	112
5	メッカ占拠事件は何を意味するか	120

6章—OPECの動揺とサウジの政策転換

1 OPECの内部分裂	125
2 転換したサウジの石油政策	134
3 なぜ政策を転換したか	139

7章—サウジの石油が枯渇する日

1 噴出する疑惑	147
2 打ち碎かれた楽観論	149
3 石油の枯渇する日はいつか	153
4 慎重かつ保守的な根拠	161

8章—石油需給が招く国際緊張

1 成長制約要因に転じた石油	167
2 窮迫する八〇年代の石油需給	172
3 発展途上国に明日はあるか	179
4 栄光と希望から分裂・分立へ	183

9章——日本の中東政策に何が重要か

補章——激変する中東情勢と日本の立場

1	五〇ドル原油時代がくる……………	189
2	増産志向の産油国はない……………	192
3	中東に蓄積される革命の気運……………	195
4	メージャーズの没落……………	197
5	多様化する産油国の販売政策……………	200
6	日本独自の中東政策を……………	205
1	七九年は中東を変えた……………	213
2	イラクとサウジの綱引き……………	217
3	イラン革命とPLO……………	222
4	ホメイニ体制の寿命とアフガン問題……………	226
5	日本のとるべき道……………	232

1 章

中東世界で何が起こっているか

1 近東から中東への現代史

今日ほど、中東という言葉が聞かれるときはない。新聞、テレビあるいはラジオで、われわれはいやというほどこの言葉に接している。しかし、われわれの周囲には、この中東という言葉のほかに中近東とかアラブとかいう言葉もある。よく考えてみると、これらの言葉の違いや意味をわれわれは正確に理解しているであろうか。

今日われわれが用いている中東という言葉は、かなり新しいものである。歴史的に見ると、第一次世界大戦前までにすでに近東とか、近東と中東の合成語である中近東(Middle and Near East)といういい方が存在していた。しかし、この場合の近東、あるいは中近東といういい方は、主としてその当時、地理学的に用いられていた用語のようである。

当時の地理学的区分では、トルコから日本にいたるアジア大陸を、近東、中東、極東の三つに区分し、近東はトルコからイラクまで、中東はイランからビルマ、極東はそれ以东としてい

た。したがって、その意味では中東という言葉はすでに存在していたが、今日の意味からするとかなり異なったものであった。

しかし、こうした地理学的概念は、第二次大戦以後大きく修正されることとなった。第二次大戦中、作戦本部をカイロにおいたイギリスは、西は北アフリカのリビアから、東はイラン、アフガニスタンを含めたこの地域全体を中東と呼んで、軍事作戦を展開した。これ以降、今日の中東という言葉が新しいイメージをもって次第に定着することとなった。

近東という言葉は、今日でも欧米で用いられている。この近東という言葉は、われわれの体験では、トルコのイスタンブールという街に立つと実にびつたりした感じを持つ。

実は、このイスタンブールという街は、地中海と黒海をつなぐボスボラス海峡で二分されている。すなわち、ヨーロッパとアジアがこの狭い海峡で二分されているのである。イスタンブール市のアジア側の岸辺には多くのホテルやレストランが並んでいて、そこで海の幸などを肴に、ワインをかたむけながら対岸のヨーロッパを眺めて感興にひたるというわけである。イスタンブールは、一九二三年アンカラに席を譲るまでトルコの首都であった。つまりトルコはヨーロッパとアジアの接点であり、まさに「近東」なのである。

第一次大戦までのトルコは、広大な領土をもつ大帝國であった。第一次大戦の動機の一つがこの「ヨーロッパの病人」といわれた大國の列強による領土分割にあったことは周知のとおりである。したがって、当時のヨーロッパはこのトルコ、すなわち近東問題に重大な関心を寄せ